

# 飛耳長目

通巻193号 令和元年12月1日発行

## 大学の門

「開頭」 六月号 通巻第78号昭和29年6月発行

「新入学の学生諸君に」 (2)  
聴講と読書

森信三

1

では一方進めて大学生活にとって何が一番大事かという問題になるわけですが、私は一応それは講義の聴講と読書とのバランスをいかにとるかにあるといつてよいかと思う。もちろんもつと他の角度から考えたなら、さらに他の重要な要が現れるかと思うが、しかし大学が学問を学ぶ所であること、やはり学問という立場を主として考えるのが本当であろう。してみるとやはり今述べたように、講義の聴講と自分の読書とを、どういう風に調和せしめるかということが、何といつても一番大きな問題と言ってよいであろう。

ところでこの問題について考えるには、どうしても先ず、講義と読書との本質的な比較検討を必要とするであろう。しかしこの問題については、立ち入って論ずるとしたら、ずいぶんいろいろな問題があるであろうが、私の考えるところでは、講義というものは、元來受身的ではある

が、基礎的基盤的知識を与えるものであり、これに反して読書の方は積極的なものではあるが、注意しないとその焦点が散乱する危険がないとは言えないと思う。すなわち講義の聴講と読書とは、それぞれその長所短所が入れ違つて互いに相補う関係にあることであると言つて良いであろう。実際講義というものは、これを聴く方の例から言えば受身的であり、これらには強制的でさえあつて、自ら進んで積極的に読んだ書物から得る知識よりも、その内容の把握が不十分だと思ふ。そのために学生の中には「講義はつまらないから、自分の好きな書物を読む」という者もあるようである。だが果たしてそれでよいものかどうか。これは確かに一考を要する問題と言つて良い。

2

ところで私には、この点に関して一つの深刻な体験を学生時代に持つている。私にとつては一つの恥ずかしい話ではあるが、諸君らのために思い切つて話すことにしよう。それは私が京都大学の哲学科に入学した最初の年のことである。当時京大の哲学科には西田幾多郎先生や、

田邊元先生が居られて、私は一年生のくせに西田先生の「哲学概論」の他に、先生の特講義が聞きたいと思ったのである。……それというのは、西田先生の特

殊講義は、その時々先生の研究の発表であって、大学生はもちろん大学院の学生から、教授の方々まで聴講にいられたのである。ところがあいにくとそれに出るためには、「仏教概論」とか合うので、その方を割愛する他ない。そこで私は「仏教概論」の方は友人からノートを借りて受験することにして、先生の特殊講義を聴くことにしたのである。こうして夏休みを迎えた私は高師時代の恩師西晋一郎先生を広島にお尋ねした際、いろいろ学校の事情をお尋ねになったので、私のことをお話したところ、先生には「そういう事はするものではない。学校の所定の科目というものは、元来無駄なものが入っていないのであり、特に仏教の概要というようなもの、今聴いておかなければ将来聞くことのできないものである。これに反し西田さんの講義などは、そんなに今無理をしてまで急いで聴かなくても、将来いくらでも聴くことができるでしょう……」とご注意をいただいたにもかかわらず、私はそれ以後も自分

の態度を改めないで、仏教概論の方は友人のノートを写して受験し、成績としてはかなりの点数を取ることができたのである。

ところが一つの特殊な領域への入門的な知識は、単に眼で文字を見るだけでは、身に付きにくいもので、結局は耳から入る必要があるという真理が、その後、年と共にはつきりして来た。というのは仏教に関する学術的な基礎知識の不足が、歳と共に私にとって問題となり出してきたのである。そうした私はとうとう三十才の半ば前後に至って、伊藤証信師から金子大栄師の書物をテキストとして、改めて仏教概論を個人教授によって、教わることにしたのである。このような面倒な仕方によって初めて仏教教学の基礎知識が、不十分ながらも一応見当がつくようになったのである。このような深刻痛切な体験を過去に持つ私は、今諸君に対して、講義の聴講という点に関して、一部の人々の考えるように、これを軽んじることには賛成できないのである。もちろん斯く云うのは、何も諸君にいわゆる点取り虫主義の勉強をすすめるわけでは決してない。だいたい私の考えでは語学や数学というような学科は、予習が大

事であり、これに反して文科的な学科は講義を耳から入れることが大事であって、毎日ノートの整理をしなければならぬなどというような、窮屈なことを言おうとしているわけでは決してない。しかしできるだけ出席して直接耳から入れて身に付けるということはその時は……アルバイトなどでやむをえない人は別……として、それほど必要性を感じないとしても、後から顧みて決して無駄でないと思うのである。

### 3

次に読書の問題であるが、これは実に重大な問題で、到底わずかな時間で十分に話すわけには行かない。だが、そう言ってしまうしておくわけにも行かないから、読書について平素考えている事柄のことを話してみたい。

まず、第一に申したいのは、人間の内的生命の強靱さの程度は、一応その人がどれほど読書慾を持っているか否かによって、測ることができるということである。つまり読書慾がないというのは、肉体的にはよし如何に頑健強壯に見えても、その人の内的生命力、すなわち精神力は、いわばすでに死に瀕しているということ

である。というのは読書は「精神の食物」であるから、食物が欲しくなくなつたとしたら、その人は精神的には最早瀕死の病人といつて良い訳である。

令和1年12月1日発行 193号通巻  
だが読書に於いて最も大事な、かつ難しい問題は書物の選択の問題である。すなわちいかなる書物を読むべきか、という問題である。ところでこれについては2つの考え方があると思う。一つは、いやしくも書を読む以上は、すべからず古典的名著を読むべし……という立場である。この立場は表向きには全く異論を挟む余地のないまでに、当然至当の考えだと言つてよい。改めて言うべきもなく古典というものは、人類がその永い歴史を通してふるいに懸けて経過してきた書物であるから、つまらぬ書物など読んでいられないで、万人の承認する世界的古典を読むのが良いという説に対しては、私と雖も（正面から反対のしようはない。）  
目長耳飛 だが、正直に言つて、私の経験では古典というものは、そのようにたやすく読めるものではない。少なくとも人々の言うようにたやすく読めるものではないと思う。もちろんこう言つると人々の多くは、「古典をたやすく読めるなどと言つた覚えはない。苦しみ苦しみ努力して読むと

ころに古典を読む真の意味はある……」  
という人が多いであろう。

確かにそれらの人々は表向き、古典をたやすく読めると言つてはいないであろう。だが私の見るところ古典を奨める人は多いが、古典の困難さを説く人は少ない。正直に言つて私には有名な古典は決してたやすくは読めない。それどころか有名な古典にして、私が読んだと言い得るものは、実に少ないのである。

実際私自身の経験から言つて、古典を読む事は断じて人々の言うほどにたやすくはない。否いま忌憚なくて言うとしたら、自分が推薦書を求められた時、相手の見塚もなく有名な古典を羅列して、平気で居るような人々の中には、自分が読んでもいない書物をも加えているのであるまいか。しかもこうした現象が、世間的にも名を知られた人々のうちに少なくないというところに、重大問題があると思う。真に自分が読んでいたら、古典を読むことがいかに困難かが分かつているから、そうたやすくは人に勧められぬのではないかと思われる。

4  
そこで私はここに諸君に対して、やや突飛かとも思うが、一つ新しい書物選択

の基準を掲げてみたいと思う。それは「自分にとつて……感動を与える書物だけを読め！しからざるものは、それがいかに有名であろうとも読むな！」と。すなわちどんなに世間的には有名な書物であっても、現在の自分にとつて、てんでちんぷんかんぷんでは仕様がなではないか。まるで蠟を噛むような無味乾燥な書物を、ムリに読んでみたとして、そこにどれ程の養分が得られるというのであるか。わが心に響かぬということとは、吸収する力が自分になくということである。これに反して一冊の書物を感動を以て読み終える……ということとは、少なくともその書物の全内容を完全に近いまでに消化し得たと言つてよい。

かくして今端的に言えば、どんな書物でも良い。とにかく現在の自分にとつてぎりぎり読みたい書物であり、しかもそれを感動を得て読み得るなら、たとえその書物が有名であろうがなからうが、そんなことには執着しないで、全精魂を傾けて、一気に読了するがよい……というのである。だからこの流儀から言えば、世間的には一流と目されている学者の書物でも、現在の自分にとつて少しも食欲をそそられないとしたら、そうした書物

をお義理に読む必要はない……というのである。これに反してたとえそれが無名の小学校の教師の筆になる教育記録で、それが真に我が魂に響いて読まれるならば、すくなくとも現在の瞬間としては、これを読む方が、無感動でしか読めない大学教授の書物を読むより、はるかに有意義だと思おうのである。要は各自自分のその瞬間において、感動に終始して読める書物を全生命を傾けて一気に読むが良いという訳である。

「それでは読書が傾きはすまいか」と言われる人もあるであろう。一応もつともな疑問とは思いますが、しかしその時の自分の生命がそれを欲して已まぬ書物を読み続けていった結果が、たとえある程度の傾向を持ったとしても、それは仕方のないことではあるまいか。すなわち常にギリギリの生き方をした結果が、ある偏向を生じたとしても、それはやむを得ないことだと言う他あるまい。

5

読書については尚いくらでも話したいことはあるが、際限がないのもう一つだけ大事なことを上げるとすれば、書物

は一度に二冊以上の書物を買わないように……ということである。すなわち書物はその時の自分の生命が一番深刻強烈に欲求している書物ただ一冊だけを求めて、買った間髪を入れず直ちにその場から読み始めることが大切だということである。出来たら書店から家へ帰る途中で、20、30ページぐらいいは切り込むが良い。そうすると家に帰ってもさらに読み終えることができる。「ところが多くの人は自分の欲しいと思う書物を、一度に二三冊求める。そこで仮に最初の一冊は読んだとしても、二冊目三冊目となると、太刀先が鈍る。うっかりすると最初の一冊さえも読了せずにしまうことさえもある。それというのも一度に、二三冊も買うからである。もし自分の読みたいと思う幾冊かの書物のうち、キリキリと絞って最後に残った一冊だけを求め、帰りの電車の中で既に二、三十ページを読みかけるといった調子なら、一冊を読了することはさほど困難ではない。それにこうしたやり方だと、書物代というものが、それほどかからないですむ。(一同笑)と言うのも人間が一月に読み得る書物の量は、特別の人を別にしては意外に少ないものだからである。

### あとがきに替えて

これは去る四月初め、神戸大学教養学部新入生に対して行った講話の概要であり、その二回目の収録である。前号の冒頭、「開頭」誌の発刊年月日を過ってしまった。今号の年号は間違いない。お詫びして訂正いたします。森信三先生特有の読書論の一端であって、広く首肯されることながらあろう。ほんとはよく本を読まれた方にして、はじめて為される読書論かと思う。愚生も多くの人々から古典を読めよ教わったが、ろくに読んではない。むずかしく面倒くさい。たとえばロシアの文豪の作品には人物の名前が数多く、覚えるのに一苦労。途中で投げ出した。司馬遼太郎の作品中、だらだらした文章に飽きがきた記憶もある。まあしかし、仰るように読書は「心の養分」ではある。(29日二繁)

〒633-0003  
 桜井市朝倉台東2-538-89  
 電話 0744-4513422 臂 繁二  
 Email: hji3@ken.jp  
 http://web1.ken.jp/syushn